

## 【概説:プレイグループ】 ～子どもの遊戯観察のメモワール～

イギリスで私が子どもの遊戯観察の機会を与えられたのは、母親たちが子どもの保育を自主運営する《プレイグループ play group》と呼ばれる場である。そこは【タヴィストック・センター】からほど遠くない St. John's Wood の閑静な住宅地にあった。地元のセント・ジョンズ・ウッド教会の集会場ホールを借り受けていて、研修を済ませて資格を取得したプレイ・リーダーの母親たちが取り仕切っていた。主任格のハリエッタとアシスタントのジャッキーは、自分たちの子どもらは既にプレイグループを巣立っていたが、当時引き続き維持運営に携わっていた。彼女らは実に見識を備えたご婦人たちだった。例えばジャッキーには6歳の娘がいるが、そのルーシーがどうも型どおりで子どもらしくないことを懸念して、【タヴィストック】で週3回のセラピーを受けさせていたという具合である。子どもがいかにも大人ぶって背伸びするのを善しとしない。不自然だからと嫌う。ただのびのびと遊ばせることを専らとしていた。ミドル・クラス以上の階層では概して子弟らを‘小さなジェントルマン・小さなレディ’という鋳型に押し込めることに躍起になっているわけだから、これは実に革新的なことであろう。【Pre-school Playgroups Association】の趣旨に賛同した親たちの活動として大いに評価される。ひたすらただ自由闊達にと子どもらを見守り育てゆく雰囲気のお蔭を得て、私はなんら束縛もなしに観察に専念できた。子どもらに混じって、私は唯の「チズコ」でいられた。振り返って、実に嬉しくも掛け替えのない経験であったと思う。

《プレイグループ》で対象とされる子どもらは3歳から5歳までの (under fives)、つまり入学以前 (pre-school) の幼児である。午前中の9時頃、子どもらは親に連れられてくる。室内にはそれぞれ‘ペインティング・コーナー’ やら ‘ドレッシング[衣装]・コーナー’ やら、それに‘ウエンディ・ハウス’ が設置されており、床には積み木やらビニール製のトンネルなどの遊具、それに机の上にはドウ(練り粉)そして粘土、ジグソーパズル、お絵描きそして紙細工用の道具一式などが揃っている。プレイ・セッション (play session) の途中、「ミルクサークル」の時間がある。子どもらとプレイリーダーそして当番の母親らが一緒に輪になって椅子に坐る。飲み物とおやつが出されて、それからプレイリーダー主導の読み聞かせ、歌そしてリズム体操など、子どもたちが一堂に集っての時間である。それから後は12時頃に親らのお迎えが来るまでの間、子どもらは自由に遊ぶ。外にはブロック塀で仕切られた庭があり、お隣の教会にも繋がっていて、そこは樹木がうっそうと生えていた。玄関口の辺りには砂箱が置いてあり、子どもは砂遊びに興じることができる。他に三輪車やらトラクターやら子どもの乗り物も用意されていた。

《子どもの遊戯観察》は、私が在籍した【タヴィストック】の児童サイコセラピーのコースでは、pre-clinical すなわち児童心理臨床に携わる以前の予備的な経験として《赤ちゃん観察》に同じく奨励されていた。実際のところ、児童心理臨床に踏み出す以前に、さらにはそれと並行して、こうした観察を経験することは不可欠だと振り返って痛感される。それは何よりも子どもらが教えてくれる【象徴言語】に慣れ親しむ、実に得難い機会だからだ。心 mind が心を紡いでゆく、そして心はどう形作られてゆくのかわかる上で、心のマトリックスとしての【象徴言語】の組成そして変遷のあらましの読解力こそがサイコセラピストの必須条件である。そして、これこそライン派の独壇場といってもいい。

子どもが生きるとは見た目ほどお気楽ではない。知ってはいるつもりだったが、これほどまでとは正直知らなかった。プレイグループの子どもら一人ひとりが得難いと私が思われるのは、それぞれが心的葛藤・相克・懊悩を抱えた一個の存在であるという紛れもない事実である。彼らの遊びがそれを如実に物語っていた。当初私が出会ったSt. John's Woodの子どもらは大概がまだ一人っ子であった。だが私の観察する1年目、2年目と時が経つうちに、幾人かは確実に弟妹の誕生を迎えた。プレイセッションの後のお迎えの時間には、母親たちが赤ん坊を腕に抱えるやら乳母車に乗せるやらして姿を現すのを眼にしているし、絶えず誰かの子どもの母親が妊娠している事実にも目敏く気づかされることもあったろう。そうした日常的な風景、それが‘他人ごと’ではなく、いつか‘自分ごと’になることをどの子ども内心ひどく怖れていた。そして、母親の妊娠及び出産という事実が自分の身に降りかかること、つまりそうした‘自分ごと’の事態がどうしても受け入れられないことに苦しむのである。弟妹の誕生は脅威なのだ。疎外され放逐されるのではないかという意識で内心怯える。遮二無二その現実に抗い、執拗に否認 denial にしがみつく。何よりも母親との関係における己れ自身の‘立ち位置’が容赦なくぶれる。3歳から5歳までの子どもの遊びの中で、「母親の胎内 inside」についての空想(phantasy)の行動化 acting-outは顕著である。実に眼を瞞るものがあつた。実際のところ、子どもは誕生後も心理的には(母親の)‘内’か‘外’か微妙に揺れ動いている。行きつ戻りつしているといえいいか、実にまだまだ身の定まらぬ曖昧模糊たる存在なのだ。ここで己れの軸足を見失ったような非現実感が問題となる。そうした混迷から何とか自力で脱け出さねばならない。すなわち‘inner-child(内なる子ども)’でありたいとの願望充足は断念されねばならない。そしていつか‘outer-child(外なる子ども)’として此の世における自分を受容し、己れの‘立ち位置’を見定めねばならない。それが‘心理的誕生’といわれるものだ。そのために子どもはシンボル(象徴)を駆使する。すなわち、外的世界に対峙しての「自己」という形態が創造されてゆく。それこそが「わたしなるもの」の‘錨’となろう。その要諦とは、「自己が自己によって抱えられる」ことなのである。

プレイグループの子どもらの遊びを私は毎回記録していた。特に観察対象を誰に予め決めてはいない。訪れたとき、傍らにたまたま居合わせた子どもとの交わりやら語らいに終始していたのだから。だから、一回一回の観察記録は雑駁な印象しかない。ところが、いざ個々の子どもに焦点を合わせて、折々の記録、すなわち私が見た・聞いたところの彼らの‘映像ショット’の一齣一齣を繋いでみると、意外にもどの子の中にも心 mind が或る連続性ならびに固有性を有しながら厳然として息づいており、むしろ執拗に或いは懸命に、その心的苦痛を徹底操作 working-through していることに気づかされ、啞然とした。遊びが子どもの単なる無邪気な暇つぶしなどではないどころか、シンボル操作を駆使して、外的世界に対峙し、自己という「心的構造」を樹立せんと懸命なのだということを知った。心はかくも生きてる！動いている！と実感した。とことんフロイトのいうところの心の‘徹底操作 work-through’である。子どもの【象徴形成能力】は、外的現実と心的現実が密接に絡み合っただけで悪戦苦闘するなかで培われる。私の観察したプレイグループの子どもらは、そうした内的葛藤の変遷を辿り、皆それぞれに己れのうちに「自己なるものの形態」の端緒を掴んでいったものと考えられる。そして、どの子ども‘outer-child(外なる子ども)’としての自尊心(self-reliance)を果敢に目指していたはず。。

サイコセラピーとは本来、そうした‘自己生成’によりいっそうの水路付けを促し、かつ援助する一つの手立てとなるものだ。そのためにセラピストは、この「象徴」を読み解く能力が問われる。【精神分析言語】とは本来まさにこのあたりのことを克明に詳述せんとするものでなければならない。知能と情動とが相携えてフロイトのいうところの‘昇華’へと進む、そうしたところの営みが眼目である。飽くまでも‘情動 emotion’が心のエネルギー源であり牽引力なのだ。情動をないがしろにしたり、または置き去りにしての【精神分析】など毛頭あり得ない。アカデミズムとはなりえない理由である。だから、この厄介至極な情動こそが肝心だとわれわれは観念することが肝要だ。その動的過程がはたしてどういう心の変態を遂げるものか、ここでプレイグループという‘場’を俯瞰してみたい。

私の遊戯観察からの知見では、子どもらの不安やら心的葛藤の引き金(契機)となるのは、一つは「対象の不在 absence」であり、もう一つは、「母胎(Mummy's Inside)」である。これら二つは密にリンクされる。対象の不在とは、即ち母親の胎内における inner-child の出現というわけなのだ。子どもはいかなる瑣末な外的事象も己れの心的現実と絡んで見逃す事は決してない。精神分析でよく云々される‘転移 transference’という現象は、実は子どもの日常の至るところに氾濫している。‘転移’でないものなどないといっていいほどだ。因みに、私はプレイグループには2年近く週1回ほぼ定期的に通っていたが、子どもらは私が訪問の曜日を変えたり、お休みしたりすることに驚くほど敏感だった。私の不在(absence)への反応は往々にして容易に子どもの攻撃欲を刺戟し、その結果として、私が彼らの突発的な攻撃性の‘餌食’になることはよく観察された事実だ。子どもらのまなざしは私の‘胎内’に熱く注がれていた。まさに inner-child(内なる子ども)の痕跡を嗅ぎ当てようとしてるみたいだ。それでどのような‘転移状況’が生じるのかは、個々の子どもによっても違う。つまりは、inner-child(内なる子ども)か或いは outer-child(外なる子ども)か、そのいずれにより軸足を持っているかに依るともいえる。興味深い観察例がある。ここにご紹介しよう。

・1976/12/14・・・私が庭先にいた折、ジェームズが私の恰好をジッと注視していたが、<腕がないね>と言う。私はフード付きのケーブ(袖なしのコート)を羽織っていた。裾はブーツが隠れるほどに長めであった。傍らにいた幼い女の子ゾーイもダブダブした長袖のオーヴァーコートを着ていたので、腕がない。ふと戯れに、私がひょいと裾を持ち上げて、彼女をケーブの中に包むようにして私の懐に抱いた。その時点で小さなゾーイはケーブの中から頭を覗かせていたから、おそらく私たち2人はまるでカンガルーの親子のように見えたのだったろうか。ゾーイは勿論嬉しがって笑い声をあげた。それが引き金となり、近くにいた幾人かの子らの攻撃欲に火が付いた。子どもの誰かが手にしていたフラフープを私に投げ入れ、私はその輪の中に捕えられた。すぐさま他の子どもらも加わり、<‘刑務所 jail’へ閉じ込めろ！>と喚く。別の誰かが<火の中へ引きずり込め！>と吼えるといった有り様で・・・私がこれはいかんと逃げる算段をする。だがしつこく彼ら(ジェームズ、シルポー、エスタ、アニャ、アルタフ)は私を追っ掛け、そしてまたまた捕られた。その大騒ぎの真っ最中、シルポーが<これはぼくのレディなんだから(This is my lady)！>と声を張り上げた。まるでぼくの‘獲物’だと言わんばかりに・・・。ちょっぴり騎士道精神もあつてか、私を庇護せんとしたのかも知れない。さすが、イギリスの成熟した男子とはかくあるべしと内心

可笑しかった。だがジェームズも負けてはいない。〈ぼくのだぞー (It's mine) ! 〉とシルポーに刃向かい、挑戦した。彼らが私という獲物を巡って争奪戦を始める。その隙に私は早々に退散した。

室内に戻ってみると、そこに幼いゾーイ、それにエマが笑顔で近寄ってきた。彼女らもまた私を捕らえようと追掛けてきたのだが、小さな彼女らだから怖くはない。ケープの裾を払って私は彼女ら二人の上覆い被せた。つまりは逆襲され、ケープの中に捕えられたわけだが、それは彼女らの思ふ壺であつたらしく、彼女らは大喜びする。……ピアラがこれらの一部始終を眺めていた。しかめっ面をして臆病そうに身を縮めている。ひどく葛藤している様子。攻撃性を表すことに困難を覚えるらしい。ミルクサークルの時間、ピアラはしばし鬱々としていたが、ジャッキーのところに行って、彼女の膝に坐りたがった。

これはクリスマスが間近な或る日の出来事であり、おそらく年中行事の「キリスト[幼子]の誕生」はこの時期、子ども誰もの念頭にもあつたと思われる。だが、それにとどまらず、実は大いなる気掛かりがあつたのだ。この年の夏頃に引退したハリエッタの後を引き継いで、後任のプレイリーダーとなつたジャッキーが妊娠していたのだ。出産予定日は翌年の5月ということだから、この時点ではまだお腹の膨らみはさほど目立つたものではなかつたが……。それも徐々に隠しようもないものとなつていたわけだ。これ以降の観察資料から、子どもらの「母親の胎内 Mummy's Inside」を巡る心的葛藤のあらましを垣間見ることができる。プレイグループの場合は、陰鬱かつ熾烈といった情動が、その攻撃性・破壊性の猛威を振り、子どもら相互に感染し合い、さらには集団暴走化し、まさに惨憺たる「転移状況」にあつた。その観察例の一部をここに紹介しよう。

・1977/03/04・・・ニールが絵の具でペインティングをしている。白い画用紙いっぱい大きな黄色のガラス窓を描いていたのだが、それを黒の絵の具で一面に横なぐりに塗り潰してしまう。ギョツとして私がどうしたのかと訊くと、〈窓を閉めたから。小さな男の子が眠るところだからなの・・・〉と説明する。カーテンを閉め切つたつもりか。それから、〈ジャッキーはここにいるの(住んでいるという意味らしい)〉と呟く。そしてふと傍らの私に向かって〈ジャッキーは、小さな男の子がいたよね〉と訊く。〈うん、女の子よ。ルーシーと言つたでしょ・・・〉と私が返答すると、彼は何やら混乱した面持ちで黙り込む。

・1977/02/04 ウエンディ・ハウスの中で幾人かの子どもらがかいがいしくお茶の用意をしていた最中に、アニヤが侵入する。無言のまま、啞然とする彼らを尻目に、テーブルの上の皿などを次から次ぎへと窓から外へ放り投げる。そしてその少し後、やにわに〈私なんて、おうちに8人も赤ちゃんがいるんだからね！〉と威張つた風に宣言し、ガリーが手に人形を持っているのを目ざとく見つけるや、〈私のよ！〉と彼からそれを奪い、しかも窓からそれを放り投げる。傍らでそれを見守っていた私がそれはよろしくないわねと言っても、彼女は無視し、まるでへっちゃらな顔をしたままである。

・1977/03/08・・・ダンとジェームズが大きな積木を積み上げて、四角いお家を作っている模様。円い戸口を一角だけ残す。彼らのひそひそ声が漏れ聞こえ、それは罨で、ジョシュアという一番幼い男の子

を、その罠に嵌めるという悪企みに熱中しているのであった。彼らは代わる代わるにジョシュアに接近し、彼をおびき寄せようとするが、うまくゆかず、断念せざるを得ない状況となる。後で、私がジェームズにどいう目論見だったのかを尋ねると、〈あのね、彼を罠に嵌めたら、拷問するつもりだったの・・・〉とタタ笑いながら、いとも簡単に自白した。

・1977/03/08・・・ニールがクレヨンでお絵描きしていた。魚が水の中にとやらパパのヴァン〔配達車〕が荷物を運んでいる途中だとやら・・・さらに一枚の紙を円く切り抜き、その真ん中にハサミで切り込み slit を入れる。私がそれ何？と訊くと、〈ボールがはじけたんだよ burst ball・・・〉と説明する。サイモンが、たまたま傍らにいたニールと私の会話を盗み聞きしたようだ。ニールとは直接なら交流なしに、即座に彼のアイデアを借り、同じことを試みた。つまり一枚の紙を円く切り抜き、さらにその円の真ん中にハサミで切り込み slit を入れたわけだが、そして同じく〈ボールがはじけたちゃった burst ball・・・〉と言う。それからなにやらモジョモジョと口のなかで独り言を頻りに喋っていたが、辛うじて〈赤ちゃんが生まれた・・・〉という言葉が漏れ聞いた。

・1977/03/17・・・ガリーが砂箱の砂で手を覆おう。指が穴の中の兎。冬の間、冬眠している。飛び出す。目覚める。また眠りに就く。ウィリアムが真似をする。お休みといって兎が眠る。そしてしばらく後で、兎の穴の辺りの砂を掘り出す。蜘蛛がいたと彼が言う。それがいつの間にかクレーンになる。そしてクレーンが兎を運ぶ。それらを崖の上から突き落とす。〈あら、まあ・・・〉と一応驚いたふうを装い、だが平然とした面持ちで、〈パラシュートで降りてこれるよね〉と言う。・・・傍らにいたアルタフが、砂の中に指を突っ込む。卵の殻が破けた音がした。そこでヒヨコが孵ったようだ。〈びよびよ・・・〉と言う。

・1977/03/31・・・ウィリアムとジョシュアが‘怪物’になった気分でもウエンディ・ハウスに侵入し、手当たり次第に物を破壊するという空想遊びに熱中している。外からそれを眺めていたサイモンが同じくウエンディ・ハウスの窓から中へ押し入った。それを愉快地感じて満足げな笑みを浮かべた。それから出てゆくときは、ちゃんとハウスの玄関口から立ち去った。

サイモンとアニヤとが彼らが一緒に作った積み木の‘自動車’の中にいる。折々に彼らはそこから這い出してはいなくなり、また戻ってくる。その度に何かしらを運び込み、‘自動車’の中のどこかにそれらをこっそり隠す。彼らは‘泥棒’なんだとか。彼らが盗んだのものとは幾つかの敷物やら一個のブリーフケースであったが、それらは他の‘泥棒たち’、つまりダン、ジェームズそれにニールらのもので、彼らの‘倉庫’（スライド・ハウス）に保管してあったものである。やがてこの横取りが発覚して、怒った彼らが一斉に取り戻しにやって来た。‘泥棒’のサイモンとアニヤはなら抵抗を試みない。たぶん手向かえないと思ったのか、縮こまっている。だが、サイモンは電話をして誰かを呼ぼうとする。おそらくは警察に電話したんだろうと思われたのだが。ところが、その電話が終わったあと、彼は受話器に唾を吐きかけた。そして悪ふざけのゲタゲタ笑いをして、〈唾を吐いたら、それが誰かさん person の口に入っちゃったよ〉と愉快そうに言う。アニヤはそれを聞いて、同じく面白がり、サイモンと同じことをしてみる。そして2人で高

笑いする。それからすぐに彼らは彼らの積み木の‘自動車’の周りをぐるぐる駆け回り始めた。私が何してるの？と訊ねると、サイモンはく泥棒を捕まえるところなの、追っかけてるんだよ>と言うが、実際のところ彼ら2人の外には誰の姿もない。ただ狂宴 orgy の余韻を愉しんでいるかのよう・・・。

さて、‘inner-child’への敵愾心そして恨み・妬みやらを乗り越えて、子どもらが目指すところの‘outer-child’の幸福とは何かが問われねばならない。つまり、われわれ大人は子どもを産み育て、大きくすることに心血を注ぐ。子どもらもまた大きくなろうと懸命に生きてゆく。それでご褒美は何？というのは変だろうか。大人のわれわれにとっても、また子どもらにとっても・・・。はたして生涯を通して、われわれは‘outer-child’であることの喜びを見出すことができるものだろうか。子どもが‘outer-child’であることを受容し、自己肯定感を抱くためには、尚も「母胎(母体)」を巡っての心的葛藤の‘徹底操作 work-through’が続く。しかも子どもらは、互い同士遊びを通して‘引力’となり‘斥力’ともなって、個々に関係づけをしながら転移状況をなおも複雑にしてゆく。かくしておのずからの自己生成を辿ってゆく。【シンボル操作】には新しい動きとして「母胎の修復作業 reparation」が登場し始める。クライム流でいえば「思い遣り concern」である。こんな観察例がある。ご紹介しよう。

・1976/06/18・・・パトリックが庭でぶらぶらしているとき、足元に見つけた或るものに強く心惹かれた。排水口である。地面下に雨水の排水路 drain があるのだろう。その排水口の鉄製の丸型の蓋をたまたま手にしていた木の小枝で開けた。そして排水口の入り口付近に詰まっていた枯葉を掘り出した。実に意欲的である。真面目な顔付きで一人熱中している。そのうち、ふいにくミルクだ。ほらここに・・・！（Milk, there!）>と一人呟く声が漏れ聞えた。私は驚愕し、彼の独り言に耳を疑った。彼の‘幻覚’に興味津々となった。何を見たのだろうか？！そこに通りすがったニールが加わる。だが数秒して、ふと或る誘惑を覚える。その地面の穴を枯葉やらゴミで埋めようとしたのだ。その衝動は紛れもなく2人のどちらにもあった。だが、やはりパトリックは溝の清掃にこだわる。2人の間で特に会話はなかったものの、ついニールも成り行きでパトリックに感化されたようで、清掃に取り掛かった。ニールが、くぼくの方が腕は長いぞ>と自慢する。そしてくもっと掘れるんだから・・・>と、己れを誇示するようにパトリックに向けて言う。2人とも地面に腹ばいになり、溝の清掃にしばし没頭していた。〔パトリックは3歳児、ニールは4歳児である。〕

・1976/10/12・・・庭先にいたシルポーが木の枝で排水口の蓋を開けた。傍らのジャスティンがくすくす笑って、そこに枯葉を投げ込んだ。それをアルタフが咎めた。アルタフとジョーが、その排水路 drain から枯葉を掘り出した。く汚い仕事 dirty job だよ>とか、ぶさくさ言いながら・・・。くでもロンドン水不足だからね。綺麗な水がなきゃだめなんだ・・・>とやら。くロンドンはたくさんのをしなくちゃいけないんだよ。排水路を清掃するとかね・・・>とか、あれこれ喋りあっている。すべてが終えて、男の子らは誰もがすっきりと満足した表情である。勿論、手が汚れてはいたが・・・。この間、イアンが仲間に入れてもらいたがる。が拒まれる。それで泣き出す。くぼくも・・・>と声を張り上げていた。〔イアンは3歳児、単純と一緒に遊んでもらえないのを恨んでいる。が、彼以外の男の子らは皆4歳児で、象徴的に自分

たちのやっていることが‘一仕事’なのだという意味づけを共有し了解し合っていたのだ！確かにイアンをくおまえには無理だ・・・>といわんばかりに斥けたのも分かる。それは「big-boys」しかできないことなのだから・・・。]

ここに登場するのが皆男の子ら、エディプス期を乗り越えたと見做される big-boys であることに意味があろう。「母胎(母体)」への concern というのは、おそらく‘父性’の芽生えでもあり目覚めでもある。疑いなく、彼らは誇り pride で充たされていた。不思議なことだが、こうした「母胎の修復作業」の動きは女の子らの遊びの中で観察されるのは稀である。どちらかという外的現実としての母親の模倣、それも競うことで精一杯だ。例外はフェイの‘看護婦さんごっこ’ぐらいである。クライン流にいうと、「母胎(母体)への concern」とは、子どもの空想生活において、原初的なシンボル要素であるところの「母親おっぱい breast」及び「父親ペニス penis」の‘結合体’の摂り入れ introjection の成果結実なのである。従って当然ながら、男の子の中の‘女の子の部分’、そして女の子の中の‘男の子の部分’がそれぞれの中で統合されてゆく。それが彼ら「自己なるもの」の中核としての‘安全基地 secure-base’となる。これが‘big-boys’ならびに‘big-girls’の歎びと矜持を保証し、支えてゆくものと考えられる。

ところで、私は【タヴィストック】在籍中、このプレイグループの観察について発表する機会を持たなかった。唯一、Miss. Kate Paul には個別スーパーヴィジョン(Private Supervision)を受けている。2年ほどの観察記録を纏めた資料を何回か持ち込んで、彼女から貴重なコメントをいただいた。懐かしい記憶である。だが、これ迄それ以外の誰にも語ってはいない。こうしてWEBサイト上に載せるのが初公開となるわけだ。40年近くも時を遡って、帰国後倉庫に眠ったままのかつての観察資料の和訳をいざ試みるや、プレイグループの子どもらそれぞれが恰も昨日のように甦った。そして、自分がこんな‘宝もの’を持っていたなんて知らなかったという妙な感慨を覚えた。心が躍った！子ども一人ひとりが生きていた。そして、私の中に見た、つまり彼らが‘私の一部’としてあるのを・・・！どんなに僅かな片鱗ですらも・・・。そうして私は改めて自分と出逢い直すことにもなった。彼らのいのちへの愛おしさはまた自分への愛おしさにも繋がる。そして、これをご覧になる‘あなた’にもそれをぜひ感じていただきたい。

そこですっかり忘れていた或ることをふと思い出した。実は、くいつかプレイグループでの観察記録を本に纏めて、日本で出版したいと思ってるの>と、ハリエツタに語ったことがある。すると、彼女は顔を輝かせて、<あら、じゃあ、わたしたち有名になるのね We are going to be famous！>と言ったのだ。そして2人で一緒に笑い合った。確かに彼ら子ども一人ひとり‘名を知られる’だけの値打ちが充分にあらうと私は内心思っている。本として出版せず、敢えてWEBサイトに載せるのは、専門ジャンルを越えて、また広く一般の方々の眼にも触れるよう望むからである。いつかはこの私のWEBサイトも閉じられる。フェードアウトする前にこの子どもたちを誰かに手渡したい、届けたい。そう願いながら、プレイグループの子どもたちの事例集を編んだ。ぜひご覧いただきたい。そしてご自分を彼ら一人ひとりの中に探してみただくのはどうだろう。活用次第では【パーソナル・アナリシス】の‘前哨戦’になるかも知れない。そのようにしていのちが受け継がれてゆくことを願って止まない。(2013/11/10 記)